Q　講話をするときに、気を付けてきたことはどんなことですか。

A　校長の講話は、校長の授業です。講話の内容は、子どもたちの心に深く刻まれるものであり、明日からの学校生活に大きな効果が期待できるものでなくてはなりません。子どもの心に響き、大きな効果が期待できる講話をするには何が大切なのでしょうか。毎週月曜日の全校朝礼における講話をもとに述べることにします。

朝礼における講話は、ごくわずかな時間ではありますが、子どもたちに大きな影響をもたらす貴重な時間であるだけに、授業と同じように事前に十分に内容や方法を吟味検討（教材研究）することが大切です。

私も、子どもたちに良い影響をもたらす話をしたいと考え、準備してきました。しかし、毎週となると、正直、やはり大変でした。直前まで話す内容が決まらず悩み苦しんだ日も少なくはありません。

講話の内容は、子どもたちが興味を示す具体的な事例(学校内外での身近なうれしい出来事、国内外での素晴らしい出来事、自然や社会の移ろいや変化等)をもとに、聞いていて楽しく、そして明日への希望のもてる内容を取り上げるようにし、子どもたちへの訓示はできるだけ控えるように配慮しました。

「授業中の教師は役者であれ！」と言われますが、子どもたちが教師の話に耳を傾けるようにするには、教師の演技力が要求されます。これは校長の講話も同じで、多くの子どもたちが真剣に校長の話に聞き入るようにするには、声の調子や大きさに変化をつけたり、時にはマイクから口を離して聞かせたりするなどの工夫が必要となります。

話す対象である子どもたちが同じような年齢ならばよいのですが、小学校のように年齢差が５年もあり、発達段階に大きな違いがある場合は、話す内容の選択や話し方は実に難しいのです。

私は、朝礼のように全校児童に話す時には、話し方はゆっくり、ていねいを原則にし、話す内容や言葉は中学年程度に焦点を置いて話すように心掛けてきました。

実りの秋を話す時には、稲穂や柿や栗の実の実物を持参したり、世界や国内での出来事の紹介では、新聞の大写真を示したりと、可能な限り具体物を示して話すようにしてきました。実物や具体物は、子どもたちを引きつける効果が大きいようでした。

校種	小学校